

MT を活用した学術英語プロダクションコース

江口, 巧
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/7170869>

出版情報：英語英文学論叢. 74, pp.59-64, 2024-03-14. Department of English, Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



MT を活用した学術英語プロダクションコース

江 口 巧

九州大学で英語ライティングを主要なテーマとした学術英語コースはこれまで長年にわたって開講されてきたが、2021年度に改訂された学術英語カリキュラム Q-LEAP 3 では、プロダクション1・2 がそれに該当する。1 クラス20名弱の少人数で行われるこの授業では、学生に500語程度のエッセイ及びリサーチペーパー（以下、略して「エッセイ」と記載）の作成を課し、それに教員が添削を施したりコメントを加えるなど何らかのフィードバックを行い、それに基づき、学生がより質の高い英文を仕上げ、英語のプレゼンテーションの題材として利用するなどしてきた。学生からすればこれだけの長さの英語の文章を作成するのは初めての経験であり、多大な苦勞を伴うものであるが、片や教員の側から見ても、一クラスの全ての学生の文章に目を通し、添削・コメントを加えるのは並大抵ではない労力と時間を要するものである。このため、従来はこのコースの担当は1学期に2クラスに限定されていたが、Q-LEAP 3 になってからは、私を含め一部の教員は1学期に5クラスを担当するようになり、エッセイ提出直後の週末は、私用を含めた他の用件は完全シャットアウトで取り組まざるを得ないのが実情となっている。

もう一つ、このコースに関して頭が痛いのは、近年の翻訳ソフト等の進展によるものであろうが、英文の作成にあたってそれらを使用していると思われるエッセイが毎年一定数見られることである。こちらとしては、学生には英文作成にあたって翻訳ソフト等の使用禁止を通達してきたが、これに従う学生が過半数である一方で、2～3割は際立ったレベルの英語を提出する学生もいて、これまでの私の教育経験からして、数年の海外経験のある者を除いて、とても通常の日本人学生が思いつくとは思えない英語表現を駆使したエッセイもわずかながら見られる。提出されたエッセイの評価は学生間で公平でなければならないため、このようなエッセイに対してどのような評価を下すか、毎年頭を悩ませてきた。

このような状況の中、2023年は情報テクノロジーにおいて画期的な年

となり、年初めには ChatGPT をはじめとする生成系 AI が世の中に登場し、また機械翻訳 (MT) も目覚ましい進展を遂げる中で、九州大学の英語教育においても、秋学期よりプロダクションコースでは学生の英文作成に MT を活用するという方針が打ち出された。これはこれまでとは真逆の方針であり、担当者として困惑する部分がかかなり大きかった。今後学生は自身の専門分野の英語論文作成において、実質的に MT を使用する機会が多くなると思われ、それをこれまで同様一律禁止とするのも時代に即していないのかもしれない。従って、今の時代の潮流を考えて、MT をどのように活用していくかを考えた方がむしろ理にかなった方向性であるのかもしれない。しかし、この方針転換によって学生がエッセイ作成の大部分を MT に頼るようでは本末転倒であり、MT の使用にあたっては、それによる学びの部分も多くなければならない。そのための一つの方法として、例えば、学生には授業中にまず MT を使用しない形で英文を書かせ、それを次の授業で MT にかけて修正していくといった具合にステップをひとつひとつ踏みながら英文を完成させていくという手順もあると思われる。ただ、この方法では学生が自力で文章を作成する段階で MT を使用しないよう監視する必要がある。また授業中に英文を作成させるためには、ある程度の時間をそこに費やす必要があり、エッセイの構造、引用方法、接続詞の句読法など、授業中に伝えるべきことも多いプロダクションのコースでは到底時間が足りなくなってしまう。そこで、MT 使用という新たな方向性のもと、どのように授業を実践していくかについて学期開始前に熟考し、自分なりに考えた方法とその実践結果を以下に報告してみたいと思う。

上に述べたように、授業はこれまで同様エッセイ作成に関連した事項を伝えること（およびその他のスピーキングの活動）を主とし、エッセイ作成は授業外の課題とした。ただし、エッセイ作成の一過程では MT 使用を導入する必要がある。しかし、同時にその使用に依存過ぎることがあってはならない。これらを考慮し、私の担当クラスでは3つのペーパーの提出を課すことにした。以下の i) - iii) のそれぞれの過程で作成したペーパーである。

- i) まず、MT を一切使用せず、自力で英文を作成する。
- ii) 次に、i) で作成した文章を MT にかけて、必要に応じて修正を施す。

- さらにこの版を授業での peer review に持参し、peer reviewer からもらったコメントにもとづき再度修正する。
- iii) 使用した MT を明記し、かつその使用によって得られた学びについて日本語のレポートにまとめる。

i) と ii) の提出を同時に求めるのは、学生が機器に頼らず、自力で文章を作成することを確実にするためである。従って、例えば最初に日本語で文章を作成し、それをそのまま MT にかけて英語に翻訳するような行為を防ぐねらいがある。iii) は、MT 使用によって得られる学びを自身で再確認してもらうためである。なお、このような方式であっても、「自力の文章」と称して、i) の段階で MT にかけてものを提出する可能性は残る。しかし、いずれにせよこの方式は今回初めての試みであり、このやり方がうまくいくかどうかは学生の提出物を見て初めて答えが出ることになる。また同時に、この方式によって教員側のフィードバックに要する負担を少しでも減らすことにつながれば、より理想形に近づくことになる。ともあれ、この方式は新しい指導方針に対応すると同時に、学生の学習効果、成績評価の公平性、教員の負担軽減といった目標をかなえることを目指すものであった。

こうして学生から提出されたペーパーを見てまず驚いたことがあった。当初こちらとしては、ii) で作成したペーパーでは MT を使用するため、(それが無料版であれ、有料版であれ) 少なくとも綴りのミスや文法ミスは皆無だと予測していた。学生のレポートによると、彼らが使用した MT は Grammarly や DeepL などさまざまであったが、こちらの予想に反して、提出されたほとんどのペーパーには平均して 3～4カ所の文法ミスが見られた。おそらく、学生は MT を過信して、再度のチェックを怠ったものと思われる。また、当の文脈ではふさわしくない英語表現も少なからず見られ、こちらが代替の英語表現を提示してやる必要があった。これに関しては、学生のレポートにも、「MT にかけてところ、こちらが当初意図したのとは異なる意味の英文が提示されていて戸惑った」という趣旨のコメントも多く見られた。

さて、3つのペーパー提出を求めた狙いの一つである、i) の段階で自力で書かせるという目標については、概ね達成されたと思われるが、それでもやはり 2 割程度はとても自力で書いたとは思われない高度な英文

を提出しているものがあつた。当然のことながら、これらの英文は、i) と ii) とで英語に顕著な差は見られなかった。これらに対する対策としては、自力で作成の英語と、学期末の期末テストとして辞書・PC 持ち込みなしで取り組ませる英語ライティング、およびプレゼンの質疑応答における学生の口頭の英語とに著しい差があつた場合は、i) に対する当初の評価の見直しがありうるとした。実際にこのような際立って高レベルの英語を書いた学生は、得てして、プレゼンでは聴衆へのアイコンタクトが全くなされず原稿の棒読みをし、また質疑応答では、質問に対し英語でスムーズに答えられないというケースも珍しくはなかった。このように見てみると、今回 i) の自力の文章の提出を要求した点に関しては、概ね効果的であつたと言える一方で、依然として、翻訳ソフト等を一切使用せずに書くよう指示をしていた従来の方式と同様の問題が残つたまゝとなつた。

しかし、今回、自力の文章に MT を使用して修正した ii) を提出させることで、自分の文章における英語の誤りに改めて気付いたという肯定的なレポートのコメントが多く見られた。それは、今学期から英文作成において MT を活用するとした新たな方針で得られた学びとして評価できると思われる。また、仮に無料版の MT を使用して、当の文脈で不適切な英文を MT により修正されなかった学生については、教員の側で代替表現を提示したため、その分の弱点は補われたと思っている。

もう 1 点、課題の評価において悩んだことがあつた。ペーパーは、英語・全体の構成・議論の説得力・引用法といった観点からの総合評価となるが、このうち英語そのものの評価については、i) と ii) のどちらを重視するかについて頭を悩ませた。極端な場合、i) で平均的なレベルに遠く及ばないペーパーが、ii) で MT を使用したために、かなり優秀なレベルのペーパーに変わるというケースがある。また、学生が使用する MT が無料版の場合と有料版の場合があり、どちらを使用しているかによって ii) の英語のレベルに有意な差が生じるため、ii) を重視した評価では、使用する MT による不公平が生じる可能性がある。このような点を鑑み、英語に関しては、i) に重点を置いた評価とした。そして、これに MT 使用や peer review を経ることで brush up された部分を加味することとした。

最後に、今回提出するレポートを 3 点としたことで、教員側にどれく

らの負担増となったかについて触れておく。先に、評価としては相対的に i) に重点を置いた評価をしたことについて触れたが、実際に添削やコメントを加えた対象は ii) のペーパーである。i) を添削したとしても、誤りの部分は基本的に MT によって修正されるので、これは意味のない作業になってしまうからである。さて、今回の方法では、教員の側は 3 つのペーパーを読むことになるので、1 つのペーパーだけを読んでいた従来の方式と比較すると、作業に要する時間は単純に増えると予想される。しかし、最も苦勞する添削の対象となる ii) のペーパーは既に MT によるチェックを経ているため、これまで原則自力のみで書かれ、途方もなく修正に時間を要したペーパーに比べると、添削自体は幾分楽になった。ということで、全体として見ると、作業量は以前と大して変わらないというのが正直な感想である。しかし、これは悲観的な見方をすると、これまでフィードバックに苦闘した週末の実情は、私の場合、このコースに MT を導入しても改善はされなかったということになる。

このように見てくると、今学期からプロダクションコースに導入した MT の利用は、学生の学習効果という観点から見ると、まず自分の力で英語を書かせることをより確実にし、MT による学びも得られるということで成果はあると思われる。しかし、上述した通り、依然として、自力の文章と称して、MT による文章を提出する可能性を完全には排除できないという問題点は残ったままである。また、添削やコメントに要する教員側のフィードバックの負担は軽減されたわけではない。従って、これが他の教員にも勧められる方法であるかどうかはわからない。今回私が採用した方式とは違って、教員の負担軽減のため、英語自体のフィードバックはすべて MT に任せるという方策もあるだろう。そして、期末テストでは、そのような繰り返しの MT 活用による学びから得た知識を生かして、全く新たなテーマでの英文作成を課して、学期初めからの学生の成長度合いを測ることも可能だろう。

しかし、考えられる授業の実践方法はいろいろあるにせよ、実際のところ英語のライティング力というものは、2 クォーター程度の期間の学習で容易に身につくものではなく、もっと長期間にわたる学生自らの自発的な学習が必要なことも事実である。従って、学生には、わずか半年足らずという短期間ではあるが、MT だけに頼るのではなく、ライティング力を高めるヒントを授業の中で授け、それを基に学生が自発的にラ

イティング力を向上させる取り組みのきっかけを与えてやることが重要かと思われる。

MT の使用を導入した今学期のプロダクションコースにおいて、各担当者は私と同様、いろいろと試行錯誤を重ねながら、効果的・効率的な授業運営を模索したものと推察する。2 クォーターに渡る新指導方針での授業がひとまず終了した今、もし、学生の学習効果、公平な成績評価、担当者の負担軽減という目標を同時にかなえる方策を実践された方には、ぜひそれを共有していただければ幸いである。